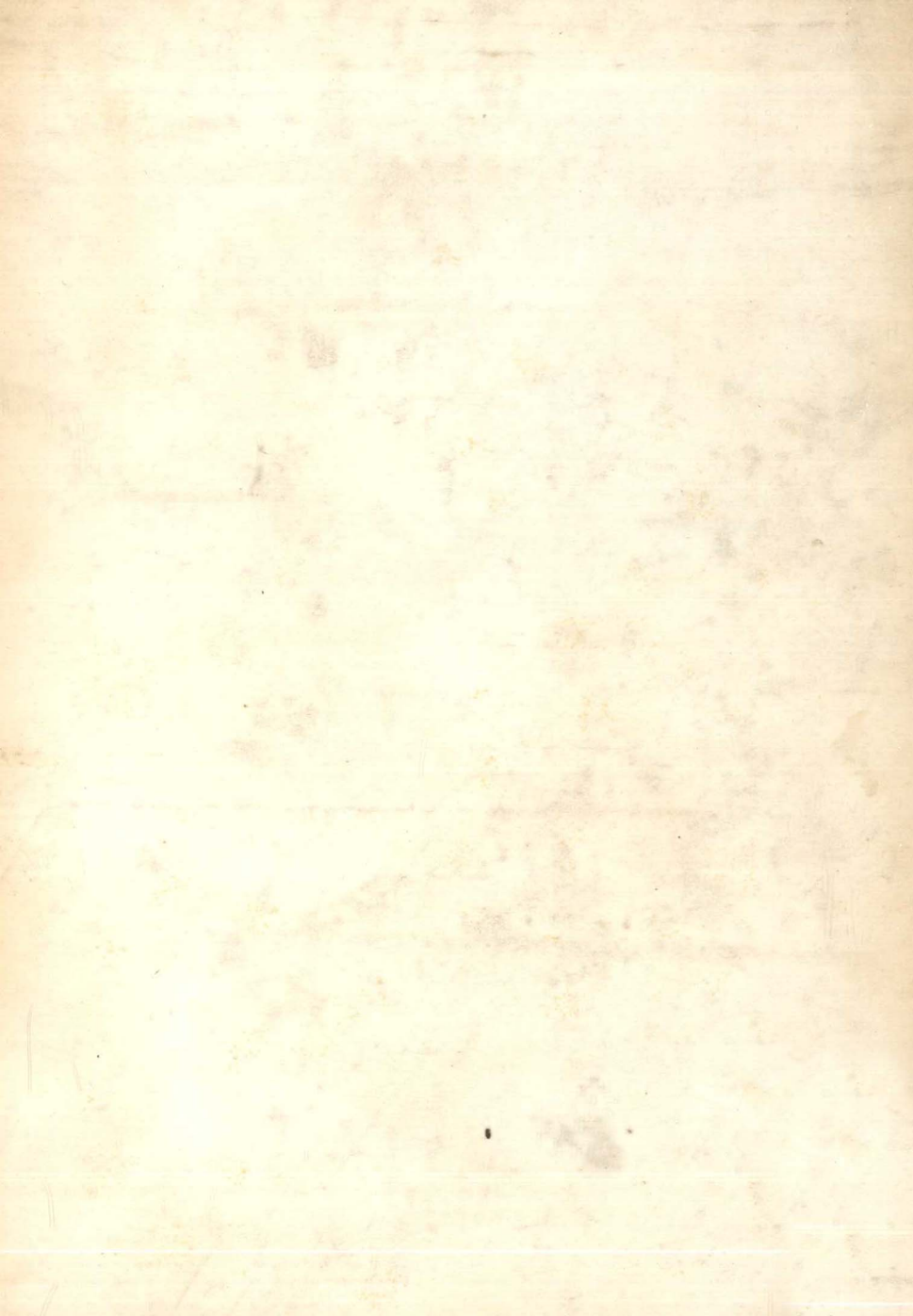




秀花曆

中山義秀

桃源社・刊

昭和三十九年三月二十日 印刷
昭和三十九年三月二十五日 発行

著 者 中山 義 秀

発行者 矢 貴 東 司

印刷者 奥 村 正 雄

発行所 株式会社 桃源社

東京都中央区日本橋蛸殻町一ノ二二
電 話 (六七二) 四〇〇一、二番

義秀花暦

定価三九〇円

著者の諒解により
換印廃止 ©

目次

義秀花暦

厚物咲の頃	三
碑の頃	三九
寂光の人の頃	八二
台上の月の頃	一〇一
夜桜	一三三
孤峭	一三九
壮士行	一五九
叛逆児	一九五
後記	二二

義
秀
花
曆

文芸朝日 昭和三十一年二月一七日

厚物咲の頃

階上のベランダに、紺がすりの袴に兵児帯をまきつけた、着流し姿の長身の男が、首をいくらか横へかしげ、惘然^{もうぜん}とした表情で写っている。

昭和十五年改造社「文芸」グラビヤに出た、私の写真だ。齢は満四十歳、場所は世田谷区代田二丁目のアパート。

それに説明が加えられている。

「このアパートにはさる十月一日で、満四年住んだことになる。いわば水に落ちた芋蟲が、身体をぎくしゃくしている間に、いつか四年という歳月が流れさったのである」

四十という歳はすでに中年に入るわけだが、六十二歳になった現在からすると、若々しすぎて少々不安をおぼえるくらいだ。まさに男ざかり、しかも独身ということであってみれば、多少な

まめかしい色彩があつてよいはずなのに、案外にそれが無い。

もっともこの無骨男のもとにも、まれに小鳥がおとずれてきて、妙な啼き音を聞かせてくれるぐらいのことはあつた。男女七不思議の一つに、数えられるかもしれない。

満四年間も住みなれたという、このアパートの居室は、南に面した二階の四畳半である。三方が壁、南窓に二枚の曇りの硝子戸があつて、その前に三十センチ幅の袋戸がついている。反対の北側に入口と一間の押入れ、方丈の一室といったところで、六尺にちかい巨体の膝をいれるに足りるといった程度の広さ、私はこの簡素な部屋に、なお半年余住んでいた。

二年前に「厚物咲」で芥川賞をもらい、仕事をすれば相応に収入もあつたのであるから、四十歳にもなつて何もそんな狭い所に辛抱していなくてもよかつたわけだが、住みなれた所は妙に腰をあげにくいものだ。

半年後私がそこを去つて近所の梅ヶ丘に一戸をかまえたのは、郷里にあずけてあつた男女二人の子供達や亡兄の遺児等、それに私の母親などがぞくぞくと上京してきて、アパート暮しができなくなつたためである。

老年になつてからの色懺悔や回顧談は、当人にとっては好い氣持のものであつても、はたから

見れば気障であり、読まされる側からすれば、鼻持ちならないことにもなりかねない。そうだとすればこれから書きつづける以下のことは、ある人間がある時期におくった一種の生活記録として、みのがしていただくよりほかはない、という事になるだろう。

妻をうしなつて芥川賞をうけるまでの二年間、私の生活は誰の眼からみても放埒無頼をきわめたものであつたに違いない。

私にしてもたしかに一面、焼けばちになつていたところがあつた。

私は妻が亡くなつた後、二人の子供達を郷里にあずけて、東銀座裏のアパートにうつつた。六階の建物で住民はおもに女給、二号、遊芸人といったところで、夫婦者はすくなかつた。ロシアに駆けおちした岡田嘉子が、地階で酒場をやつていた。

女ばかりの、しかも容色と若い肉体を売りものにしてゐる女護ヶ島に、独者の男が一人住んでおれば、色めかしい情事の一つや二つ、起つてもよさそうなものだが、そのような奇蹟は一度もおこらなかつた。

彼女達はそれぞれ一身上のなりわいに忙しくて、金も名もなく四十近くなつてアパートに一人佗しく暮しているような男には、笑顔はおろか涙すらひっかけない。

その憾^{うら}みからいうわけではないが、彼女達はおそろしく現実的で計算高かったということだ。つまり意味もなく隣人に愛想好くしたり、女性らしい優雅さを發揮したりするのは、彼女達にあってまったくナンセンスだったことを意味する。

彼女達は男性の真情というようなものを信じなかったし、たとえ信じたい心はあったにしても、裏切られる場合が多かったのであらう。酒場その他の遊び場に出入りして、女性をあさる男達に、真情などを求めるのは海中に珠をさぐるよりむずかしい。

当時銀座の花とうたわれた、二人の美しい女性があつた。大岡昇平もその一人を小説に書いているが、あまたの浮かれ男の間を転々したはて、四十代にはいつてから、これという理由もなく自殺してしまった。他の一人は脳病院か何かに入つて、もはや人としての意識もうしなっているらしいが、その時々々の流行に身をかざるのを得意としており、この世をおもしろおかしく送っているうちに、年老いてそろそろ男からの需要が少くなりかけてきた時、幸運にも自己を茫失する病におそわれたわけである。

彼女達には終生をたくする男性がなく、子供がなく、責任もないかわり自由で、自分一身の喜びを追えばよかったかわり、生活の底に沈^{ちん}澱するものがなかった。彼女達が真に生きるといふ事

を、考えたことがあつたかどうかもある。浮かれ男が彼女達をこの上ない遊び相手としたように、彼女達も男性をば金をもって自分の肉体をあがなってくれる、顧客としか考えなかったであろう。

もっともこの世を遊び所と考えて、自分の欲望にだけは忠実に、何事もなく時をおくってゆくしゃれた人間は、女性ばかりではなく男性にも数多くいる。昔もいたし将来もその数を絶つことはあるまい。

六十余年の星霜をおくってみると、人生の収支勘定が一応帳面にはつきりと出てくる。まったくその決算は、ドライきわるものだ。そのドライな収支面に何とかうるおいをもたせ、できれば花を咲かせようというのが、小説家とか芸術家とか自負するエリートの狙いどころ、腕の揮いどころであるに違いない。

讃むべき哉、美しい虚偽の創造者達——だが、私にはその才能がない。

銀座裏のこのアパートの二室を借りて、ある老夫婦がすみついていてた。主人は築地の魚問屋を相手に、金貸しをやっていた。短期の金融なので高利にまわり、銀行に多額な預金があるという。老妻のほうには子供がなく退屈なので、白黒まだらの狎ちんをつれ、階下の事務所へ、よく暇つぶし

にきていた。皺ばんだ小さな丸顔に、黒く白粉ぶちのできた、醜いというより悪相にちかい、無愛想な表情をしている。齢は六十歳をとうに過ぎてゐるらしく、菓子を少しばかり紙に包んで、これでも五十歳をすぎた管理人に贈ったりしていた。

若い時分肉体を酷使して荒稼ぎをやった老妓や、淫売あがりの銘酒屋の女将などにまま見うけるタイプだ。精神の酷薄さが、そのまま顔にでているといった、不愉快きわまる顔つきである。

管理人の話によると、この老婆は東南アジアや南洋各地を股にかけた、娘子軍の一人のなれの果であつた。シンガポールあたりで、南方巡業の曲馬団員とできあい、内地へ帰ってくるとためた金で、魚河岸相手の金融をはじめたのだそうである。

老婆がこの銀行にはいくらいくら、あの銀行にはいくらいくらという風に自慢話をするので、管理人は彼女の裕福なことを知っていたわけだが、その上彼女の知らないことまで知っていた。

彼女は亭主にだまされていた。彼女より十幾つ年下の亭主は、彼女に内緒でほかに若い女性を囲っているばかりか、彼女の貯金を全部自分名義に書替えてあるのだという。

彼女は文盲なので、預金帳を見せられても分らなかつた。亭主が毎日取立ててくる利息の報告をきき、それだけ彼女の貯蓄のふえるのを楽しみにして、アパート生活の無聊をまぎらわしてい

る。

「あの婆さん、いつ亭主にすてられるか分りませんよ。さんざん男の生き血をしぼった酬いでさア。しかも、何も知らないだけ、気の毒です」

老管理人はそう語った。彼はこのアパートを建てた土建業者の古い身うちの一人らしかったが、砂と石の盆石づくりを唯一の特技として、平凡な余生にあまじながら、百人をこえるアパート住民の内情にはすべて通じていた。

数千数万の男をだましたたか者でも、このように一人の男に瞞される。さきにあげた自殺した女といい、錯乱して入院中の女といい、女性とは何と哀しき者であろう。

妹は新橋の芸妓で、姉は人の囲われ者になっている若い女が、私とおなじ六階の表通りに面した角の部屋にいた。

細おもてのかぼそい、昔風にいえば楚々とした身体つきの美しい女性であったが、ふだんは部屋にばかり閉じこもって、ほとんど外出したことがない。時折訪れてくるのは芸妓の妹ぐらいで、通ってくる旦那の姿も見ることがなかった。

この女もほかの住民達と同様、ひどく無愛想な女で、毎日部屋の中でどのような生活をおくり、

そしてどのような身の上なのか、一切知るよしもなかったが、ある日の午後けたたましい悲鳴とともに、いつも固くとざしてあるドアをあけはなち、はだして廊下をとびだすなり、自動式のエレベーターにも乗らずに、いっさんに階下へかけおりて行った。

一体何事がおこったのであろうと、後で管理人に聞いてみると、ちょっとした隙に日頃秘蔵にしていた蓄音機のレコードと、命よりも大切な宝石を、ごっそり盗まれてしまったのだそうである。

このアパートは昼夜とも出入が自由で、コンクリートの廊下は街路とおなじであった。屋上の浴場はもとより、便所へゆくのにさえドアに鍵をかけなければならぬほど不用心である。

私のように何も持たない者でも、ふだん着の羽織を持ちさられたことがあるし、浴場のかえり兵児帯を落して、それなり行方不明になったこともあった。

悲鳴とともに飛びだした可憐な女性は、そのようなことは百も承知で、秘蔵の財産をまもるために、思いきって外出もできなかったほど用心していたのであろうが、ちょっとした油断から取返しのつかない災難をうけた。おそらく犯人はかねてから、彼女の財産に目をつけ、その隙をねらっていたものに相違ない。

表面はなやげに見える銀座の女護ヶ島も、うちに住んでみるとこのようにさむざむとしたものである。すべての住民がそうだったわけではあるまいが、なんといっても女性の一人暮らしはわびしいかぎりだ。

男やもめの私にしても同様であつたが、金があれば私は何処へでも勝手に飛びあるいた。昨日は東の色ざとにねむり、今日は西のくるわにただよといった工合で、十余年間の家庭の束縛と、生活の重荷からときはなれた私にしてみれば、まさに理想とすべき境地であつたはずだが、私の感情はすさみ心は寂寥に嘯まれていた。といって私は、あながちに愛する女性をもとめていたわけではない。失業の苦にうちひしがれ愛妻を貧窮のうちに死なせてしまった私は、生活の安定をえないかぎり、恋愛や結婚はよい実りをもたらさないものであることを、骨の髄まで知らされていた。これが世の実際で、私があらためて断るほどのことでもない。

それに私は心から愛する女にめぐりあつたばかりでも幸福であるのに、その女性と十余年生活を共にして二人の子供まで設けたのであるから、その間たとい数々の不幸に見舞われたにしろ、その上になおよい女性を望むのは、神を畏れぬ欲心と非難されてもいたしかたがない。

不幸のうちに死なせた、亡妻にたいする罪の贖いからしても、私はあらゆる女性に優しくあら

ねばならないはずなのに、そうできなかったところが本心をいつわれない人間の真情である。

私は半年ばかりで虚栄の街といってもよい銀座をひきあげ、またもとの世田谷へかえった。東北の山村に育った私は、人間味のない銀座の世界になじみえなかった。

浪人者の次男坊の父と零落した本陣の末女に生れた母とは、人里をはなれた河辺の水車小屋で私を生み、村人に馬鹿にされながら辛抱づよく働きつづけ、やがて村人に金を貸しつけて町に出たのである。

そうした境遇からか私は自然にひかれ、人間の真情というものに飢えている。見せかけばかりのつきあいや世渡りには我慢がならなかった。男女の間ではなおさらのこと、銀座での心情の生活は荒涼としたものであったにしても、真情のある女性に出会わなかったことを、私はむしろ幸運だったと見なさなければなるまい。

人によって好き嫌いがあるように、年代によって同じ人間の好みもかわる。

私はこの頃、冷えた自分の心情によるのか、痩せ身の人よりも肥り肉じの人に心をひかれた。豊で豪華な感じのする面差し、源氏物語繪巻などに見られる、ああいった風姿の女性である。

西銀座に清水崑が毎晩通いつめていた酒場があった。「芸術は長し」という意味のラテン語をかかげた店であったが、マダム格の女性のほか数人の女性がいた。

清水崑が一夜の通いも怠らぬ精勤ぶりは、このマダムが目あてだったようである。清水は見かけによらぬ艶福家なのだが、源氏の君も業平も時には的をはずすことがある。それで男女相愛の關係に、いくらかでも公平さが保たれるわけなのであろうが、この場合清水の秤皿ははかりざらバランスをうしなつて、空におどつていた。

つまり一人もがきの片思いというやつで、うまく重心がとれなかった次第であつたが、それで穩しくひっこむような意気地なしと違い、愛を告白して巧みにかわされた後も、なお敢然として通勤をやめない。

私もお供でその店へ行っているうち、一人の女人が好きになった。冒頭に書いておいたように、平安朝風の豊饒な味わいの女性である。齡は二十三、四か、五、六といったところ、三十代を終ろうとしている私とくらべるとはるかに若い。

いつも和服で黒めいた服装であつたが、着物も帯も安物でなかったせいかわ女の厚味のある面影に、陰翳と余情をくわえていた。